

---

# 四季シリーズ 僕等は・・・

サクラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四季シリーズ 僕等は・・・

### 【Nコード】

N0236A

### 【作者名】

サクラ

### 【あらすじ】

ついにコナンは新一に戻る。しかし組織はまだ存在し、日本いや、世界を暗黒の世界にしようともくろんでいる。新一はこれを許せなくてある決意をする・・・。

## 春の華1（前書き）

とにかく本編にでてくる人物をつかっていますが、時がたつごとに登場人物たちに子供ができたりも「爆」する可能性があるのです。このところご了承ください。

## 春の華 1

組織の機能は完璧に近づいている。  
そう灰原に聞いたのは昨日の夜だった。

「私が思うに組織の機能は完璧に近づいているわ。  
あとは裏切り者やあなたを殺せばもう完璧になると思うの。  
ヤツらは必死に私たちを探してる・・・。

私はまだ子供の姿だし、変装してるから、わかりにくいけれど、  
あなたは違うわ。

せつかく戻ったんだから、蘭さんを傷つけちゃダメよ。  
わかったわね。」

「・・・わかってるよ、ンなこと・・・。」

「それじゃああなたはいつでも大丈夫なようにしつかり寝ることね。」

「じゃあまた何かわかったら教えてくれ。じゃあな、おめえも気を  
つけるよ。」

表には表さなかったもののさすがに動揺しているようだった。

「・・・私が原因なのに・・・何えらそんな事いつてるのかしら・・・。」

私はあの人たちに出会ってから確かにどこか変わった。  
今まで薬を作っていて罪悪感を感じる事などなかった。

しかし今は、なぜあのような薬を作ってしまったのだろうと思う時  
が増えた。

あんなにたくさんの人を傷つけ殺すのだったら私が代わりに死んだ  
方がよかった、そう思った。

あの時、そう工藤くんにごぼしたとき彼は怒ったわ。

『そんなことあるわけねえだろ！！おめえの姉貴だっておめえがい  
たからこそ頑張れたんだ。』

それにおめえがいるからこそ俺は希望を捨てずに生きて来れたんだ。

自分の命を粗末にすんな！！おめえのこと必要としてるヤツらいつぱいいるだろうが。

博士とか歩美ちゃんとかげん太とか光彦とかいろんな人がおめえのこと大事に思ってくれてるだろ。ンなこと言っなよ・・・。」

「さてせめて私は敵側の様子でも探らなきゃね。」

そして灰原はパソコンに向かった。

どうする、もし組織の手が蘭やとうさん、かあさん、少年探偵団などにまで渡ったら・・・。

ただ俺はひたすら考えた。

もし・・・もし他のヤツを巻き込むような事があつたら・・・。

俺はその時は命を捨ててもいい。

だかそいつらの安全を確保してからだ。

いやそいつらの安全を確保するために死のう。

誰かを事件に巻き込むなんて俺のプライドが許さない。

「ハア・・・どうすっかなあ・・・。」

## 春の華1（後書き）

あまり思うように文章に表せていませんが・・・これからどんどん展開していくのでぜひ読み続けてください。

蘭と新一の愛、友情、その他の人間の生きていくための大切な要素をあらわした小説にしたいと思っています。

ところでみなさんは灰原は元の姿に戻った方がいいと思っています。おられるのでしょうか？

私は・・・まあこの後の展開に答えが書かれていくのですが・・・。灰原には強くなってほしいですね・・・。

## 春の華2（前書き）

とにかく本編にでてくる人物をつかっていますが、時がたつごとに登場人物たちに子供ができたりも「爆」する可能性があるのです。このところご了承ください。

## 春の華2

「新一くまだ寝てるの??」

耳元で蘭の声がする。合鍵で入ってきたんだろうか。

「ねえ起きて新一!! あたしまで高校遅刻しちゃうよ。」

「ねえ起きてったら」

「……。」

「ふふ。やっと起きた。めずらしいね、新一が寝坊するなんて。」  
「ちゃんと寝なきゃだめよ、」と言いながら作ってきた朝ごはんを俺の家の食卓に並べる。

俺のささやかな幸せのひと時、しかし、灰原の話を思い出して後どれくらいこの生活が続ける事が出来るのだろうかと思っただ。

もしかしたらこれが最後の一緒に食べる朝食かもしれない。

そう思うと悲しくなった。

せっかく……せっかく蘭のもとへ帰って来れたのに……。

「……新一……どうかしたの??」「なんか考え事してるみたいだけど、すごく辛そうな顔してる……。」

「……なんでもねえよ。……ちよつとな。」

元に戻った後俺は蘭と約束をした。

決して隠し事はなし、とまでは言わないけれどできれば隠し事はしない。

そりゃあ俺は探偵だから依頼人の秘密は誰にもしやべってはいけない。

それ以外なら二人の間にはなにも壁がないようにしよう、と約束したのだ。

なんてっただって未来の奥様だもんなんつ、とからかうと、はずかしいじゃない、と顔を紅潮させて言った。

そんな蘭の様子が嬉しくて、やたら上機嫌になってたっけ。

それで園子が「新一君なにかあったの??」とにやけ顔で蘭に聞い



てたっけ。

ただ平和さえあればいいのに・・・蘭のそばにいれさえすればそれでいいのに・・・。

「・・・これは・・・?!」哀は驚きの声を上げた。

何気なく開いてみたホームページにお屋敷の見取り図がある。

そのお屋敷の見取り図・・・まさに工藤邸のものだった。

しかも監視機器の場所までも正確に赤の丸でしめされている。

さらにそれはゲームになっていて、「どうしたらこの監視機器だらけの家の奥の部屋にあるチーズを食べられるか」がテーマだ・・・。チーズとはまさに新一のことである。

このホームページはまさに組織の連絡方法のひとつであったのだ。

「・・・まさかこんなおおやけに連絡が行われているとは思いませんでしたわ・・・。」

確かにインターネット上ならば世界各国どの国でも観覧できる。

その証拠に世界の先進国のどの言葉でも観覧できるようになっていた・・・。

「意外と早く来るかもしれないわ・・・。」

## 春の華2（後書き）

哀「どうも事件が起きる前の雰囲気ねえ。」

SA「そうやねん、おきるねんよお。」

新「・・・幸せに生きたいよ・・・。」

SA「まあ頑張れって。」

蘭「てゆうかSAKURAちゃん・・・もつとマジメに書いてね？」

たまに共通語が大阪弁になつてるでしょ。」

SA「あ、ばれた・・・?!」

新「バレバレ、つうかSAKURAの大阪弁と服部の大阪弁はまたちよつと違うんだよなあ・・・。」

SA「大阪弁は奥が深いからな。」

哀「そのわりにあなた共通語よね・・・。」

SA「うつ・・・。」

蘭「まあこれから読んでくださいねっ!!」

新「よろしくな。」

### 春の華3（前書き）

\*これまでのあらすじ\*

組織が新一と灰原を探している。

組織は完全に近づいている中、新一は、蘭は、灰原は・・・。

### 春の華3

「おっ！？なんだこれ??」

快斗もそのころ叫び声をあげた。

前から怪しいと思っていたホームページに新一の家の見取り図が出たのだ。

彼はそのホームページに黒ずくめの組織の仲間として参加している。暗号を作る天才は他の暗号を解くのも天才並だ。

しかし・・・組織も落ちぶれたものだ。

快斗が組織のホームページに入り込んでいるのに気付いていないのだから。

「しかし、探偵君も大変だね。

よし、こうして、ああしてつと。」

よかった今日も無事に終わりそうだ。

蘭と二人で帰路につき、内心ホッとした。

蘭は無邪気に笑ってみせるけど、どこかひっかかる笑顔だ。

やっぱ、蘭気付いてるよな・・・。

「・・・蘭、あのさ、話があるんだけど・・・。」

蘭はおびえた顔をした。

「なあに?? 新一。」

「とりあえず俺の家に来てくれ。」

そして二人は工藤邸へ・・・。

『二人。マウスとその恋人工藤邸へ入りました。』

「探偵君、監視されてるよ・・・。気付いてないのかな、勘にぶってんじゃねえの。」

どう話すかなあ。蘭には危害がおよんでほしくないんだよ・・・。でも、死ぬかも知れない、なんて言ったら・・・蘭はなんていうだ

ろう。

怖い・・・でも隠し事なんてしたくない。

「あのな、蘭・・・その・・・、えっと・・・。」

「新一、頑張つてね。」

「え・・・蘭??」

「なんか深刻な事件に巻き込まれてるんじゃないの??

でもご飯は朝昼晩ちゃんと食べなきゃだめよ。」

「蘭・・・。」

蘭は笑顔で言ってくれた。

「だって私、探偵している時の新一に惚れたんだもん。」

心配してた、ついてくるとか言われたらどうしようって。

蘭を危険な目にあわせるわけにはいかない。

そう思っていた自分を理解してくれる蘭がうれしくて、おもわず抱きしめたくなった。

「ありがとう。」

ひとつ心の重荷が降りた気がした。

蘭が認めてくれた、理解してくれた、それだけのことが俺にとって

どれだけ大きい事なのだろうか。

蘭はもう俺にはなくてはならない。

何で、何で俺たちなんだ・・・。

あの後蘭と他愛のない話をして蘭の大好きな紅茶を二人で飲んで

新一はコーヒーが飲みたかったのだが・・・ 永遠に続くようで続

かない時を幸せを噛み締めた。

その間中一度もあの話はしなかった。

それも約束だった。

二人でいる間、新一の命が脅かされる場合以外は事件の事は口にしない。

蘭がそうだったのだ。

せめて二人でいるときぐらい探偵のことは忘れて、と。

### 春の華3（後書き）

蘭「新一・・・頑張ってね。」

新「ありがとう・・・蘭。」

SA「・・・ここでイチヤつかないでね。」

蘭「・・・つ。ところで本編どうでしたか？？」

新「結構真剣な展開だよな。」

SA「これはマジメに書いてるから。」

蘭「SAKURAこれからも頑張ってね。」

SA「ありがとう。」

新「これからもよろしくお願いします。」

#### 春の華4（前書き）

組織のホームページに工藤邸の見取り図が載っている。

あきらかに組織が動いていることを知った新一は、灰原は・・・。

組織との対決に向けての準備は・・・？

## 春の華 4

「探偵君なんだか暗いねえ。」

「・・・快斗おめえそこで何やってんの??」

「あら、新一君冷たいツ。ただ会いに来ちゃダメなの??」

「頼むから、その顔で蘭の声で話さないでくれ・・・。」

「ところでマジに話があんのよ。聞けよ??」

「・・・何??」

つまりその後の長々しい快斗の説明を聞きながら新一があせり始めたのは言うまでもない。

すぐ新一のパソコンを開き、そのホームページへ飛んで相手側の様子を探る。

「・・・これはやべえな・・・。」

「ところで探偵君、君マークされてるの気付いてないの??」

「んなわけねえだろ、気付いてるよ。ただ向こうの出方を見ようと思つてさ。」

ナルホド・・・とうなずく快斗をおいて新一はそのホームページを調べ始めた。

それはさすが組織だけにお酒のホームページだ。

ヴェルモットとかジンとかウォッカとか・・・おなじみのお酒の説明がいっぱい並んでる。「ちなみにここにはシェリーはなかった。」

どこかに・・・どこかにあるはずだ・・・キーが・・・

画面のどこを押しても何も反応はない。

・・・まさか・・・

「おい、おめえやつらの会話を聞いたんだよな!!」

「あ、ああ。それがどうした??」

「なんつってたんだ!? その会話そのまま言ってくれ!!」

「二人。マウスとその恋人人工藤邸に入りました。」

そして新一はURLの最後のところにmouseと入れた。



『ページが表示できません。』

「違うっ！！」

これは違うと思ったけれど nezumi と入れた。  
やはりこれも違う。

なんだ・・・なんなんだ！！

フツと目を画面にやった。

『さて、どうすればチーズを食べられるでしょう？』

ふざけやがって！！ぜってえみつけてやる。

俺をチーズだなんて、バカにすんな。

・・・さてよ、俺をチーズにみたててんのか・・・そして俺が今探しているのはそのチーズに関する情報だ・・・。

そうだ！！チーズじゃねえか！！なんで気付かなかったんだよ。

そして『世界のチーズ』のコーナーをWクリック。

画面のどこかにキーが・・・あった、すんげえ高そうなワインのビンがページのはしっこにある。

それを開いてみると、組織の裏ページに行く入り口があった。

『パスワードを入力してください。』

「さすが探偵君。俺っちが丸半日かかった作業、そっこで片付けてんじゃん。ちなみにそのパスワードが『mouse』だよ。」

「おめえ・・・知ってたのかよ・・・。」

組織の裏ページ、まったくすごいもんだ。

あからさまに俺のプロファイル載せてやがる。

しかも、俺担当のやつらのコードネームまで・・・。

「そこに・・・前までヴェルモットも載ってたんだけど、多分はずされたんじゃないかな。」

「ああ、あいつは母さんの知り合いだからな・・・。さすがに母さんの子供を殺すのは気が引けるんだろ。仲良かったからな・・・。俺もよく家に連れてつてもらったよ。」

「そつえばあの子は？？赤みがかった茶髪のAPT-X4869飲んだ子。あの子ならこのマニアックなページにも入り込めるんね

えの??」

たしかに、と新一はうなずいた後で携帯から電話をかけた。

「博士??ゲームの調子はどう??」

「ああ、それがうまくいかなくてのお、地下室こもりっぱなしじや。」

「そつか、まあ頑張れよ。無理しねえようにな。」

さすがは東の高校生探偵、もうすでに博士とも相談して簡単な暗号を決めたらしい。

「灰原、地下室こもりっぱなしだつてよ。大丈夫かな・・・あいつ、このことになる、すんげえ無茶するんだよ・・・。」

「人のこと言えないと思うよ探偵君・・・。」

「快斗・・・おめえに頼みたい事がある。」

#### 春の華4（後書き）

快「今回は僕がみなさんをご案内いたします。」

SA「よろしく！」

快「ところでSAKURAさん今後の展開は決まっているのでしょうか？」

SA「それは……この後「四季シリーズだから」赤い夏、秋の童話、白き冬ってな感じで展開していきます」

快「ふう〜ん……。」「

SA「それでちゃんと大阪組も登場やで！！「大阪組ファン」」

快「ところでなんか今書いてるところまで読ましてもらったけど……。。。」

SA「あああああ〜〜〜！！読んじやだめええええ〜〜〜！！！」

快「なんか……。俺結構出てるじゃん」

SA：コケッ

「こんなダメ小説をこれからもよろしくお願いします。」

## 春の華5（前書き）

静華「なんであたしがここにひっぱられたん？」

sakura「いやぁ〜静華姉さんは出る予定がないのでここに出てもらおうと思って。」

静華「あたしを出させへんとはええ度胸やな。」

sakura「えっ「汗」っでは静華姉さん、コメントをどうぞ！」

静華「おもしろいかもしれへんけど、まあアウトやと思うんやっただ出てくのが一番や。」

sakura「怖いこといわんといってください、姉さん……。」

## 春の華5

R R R R

R R R R

「もしもし和葉ですけど。」

『あ、ごめんね急に……。』

「あ、蘭ちゃん！！どないしたん、急に。工藤君となんかあったん？？」

『……。あつたといえばあつたけど、ないといえばないのよね。』

「どないやねん。ほんで何があつたんよ、ほら蘭ちゃんはよ、吐き！！」

『あのね、和葉ちゃん……。服部君って……。和葉ちゃんに隠し事とかする？』

「へ？？あ、あの、蘭ちゃん何言うてんの？？」

『だから、隠し事とかする？？って……。』

「そ、そんなん、あ、あたしと、平次はカレカノでも、あらへんねんから、秘密とか打ち明ける必要あらへんやん。」

『そんなことないわよ。ハタからみれば立派なカレカノよ。』

「と、とにかくおうて話しよ。「なんや蘭ちゃん悩んどるみたいやしなあ。」」

『そうね、じゃあ明日丁度土曜だし空いてる？？』

「あいとるで、ほな工藤君もおることやし、平次引き連れて東京いくわな。」

『じゃあバイバイ。』

ツーツーツー

なんか蘭ちゃんが……。変や……。工藤君なんかしたんとちゃうか？？

まあとりあえず話は東京行ってからやな。  
ガラガラッ

「おばちゃん平次おるう？？」

「おるよ、部屋でなんかしとるみたいやから、用事あるんやったらどうぞ。」

「おおきに。」

「なんでわざわざこんなはよ起きて東京いかなあかのやつ!!  
姉ちゃんと話あるんやつたらお前一人でおうたら済む話やる。」  
「はいはい、文句いわへんの。」

んなこと言つて平次かて工藤君とおうて話したいんとちゃうん?  
？」

それはそやけどしかしなあ・・・、とまだ　ブツブツ言っている平次の腕を引っ張つて新幹線に乗り込んだ。

「はあゝ、新幹線のる時間長いのゝ。」とグチをこぼす平次に和葉が思いついたように聞いた。

「なあ平次、あんたあたしに隠し事とかしとったりする?？」

「なんで俺が和葉に隠し事せなあかんのや、俺の事疑つてんか?？」

「え、ちゃうちゃう。なんとなく聞いてみただけや・・・。」

と和葉は紅潮して答えた。

まさかこんなこと言われると思わへんかったから・・・。

まるであたしが彼女みたいな言い方やな・・・。

『次は東京、東京。お降りの方はお荷物のお忘れ物なきようご注意  
ください。』

「よっしゃ和葉!! ついたでえ!!」

「さっきまで小学生みたいなことブチブチいうとったんはどこの誰  
や・・・。」

「・・・じゃかしい・・・。」

そして二人は蘭の家、毛利探偵事務所を目指した、仲良く恋人のよ  
うに。

幸せな日々、恋人、友達、永遠に続けばいいのに、続かない日々。  
俺のそばで咲く春の華。

それを守るためなら命だって捨てられる。

愛するものを守るため。

俺は今日を生き抜く。

たとえ俺に明日がなくとも、夢い春の華は咲き続ける。

俺が咲かせ続けるから。

## 春の華5（後書き）

平次「読んでもろうてSAKURAえらい喜んでますわ。」

和葉「SAKURA！感謝せなあかんで？読んでもらうんは幸せなことなんやからっ！」

SAKURA「へえまったくでございます。ありがとうございます、ところで大阪組の登場です。」

平次「なんや作者は大阪組のファンやから何をしてでも大阪組を出したかったらしい・・・。」

ええことやっSAKURAお前はええ奴や！」

和葉「そうでもあらへんで、その後読んでみい。」

SAKURA「ああ！！それはあかん！！！」

平次「なんや・・・フムフム俺を殺す羽目になっても登場させて和葉を悲劇のヒロインに・・・？！？！」

SAKURA「逃げるが勝ち・・・。」

平次& amp・和葉「コラっっっ！！！！！！！！！」

SAKURA「ごめんなさあゝい！！！」



## 春の華5（前書き）

どうも！SAKURAでございますう！。

大変遅くなりまして、ご迷惑おかけしたかと・・・。

ところで私は最近悩み事があります・・・。

あのお・・・みなさんのペアルックが好きなんですか？

私は新-X蘭ちゃんが好きなんです、中にはコナンX灰原だった  
りする人もいらっしゃる・・・。

またよければみなさんの好みのカップリングを教えてくださいm（

！）m

## 春の華5

R R R R

R R R R

「もしもし和葉ですけど。」

『あ、ごめんね急に……。』

「あ、蘭ちゃん！！どないしたん、急に。工藤君となんかあったん？？」

『……。あつたといえばあつたけど、ないといえばないのよね。』

「どないやねん。ほんで何があつたんよ、ほら蘭ちゃんはよ、吐き！！」

『あのね、和葉ちゃん……。服部君って……。和葉ちゃんに隠し事とかする？』

「へ？？あ、あの、蘭ちゃん何言うてんの？？」

『だから、隠し事とかする？？って……。』

「そ、そんなん、あ、あたしと、平次はカレカノでも、あらへんねんから、秘密とか打ち明ける必要あらへんやん。」

『そんなことないわよ。ハタからみれば立派なカレカノよ。』

「と、とにかくおうて話しよ。「なんや蘭ちゃん悩んどるみたいやしなあ。」」

『そうね、じゃあ明日丁度土曜だし空いてる？？』

「あいとるで、ほな工藤君もおることやし、平次引き連れて東京いくわな。」

『じゃあバイバイ。』

ツーツーツー

なんか蘭ちゃんが……。変や……。工藤君なんかしたんとちゃうか？？

まあとりあえず話は東京行ってからやな。  
ガラガラッ

おばちゃん平次おるう？？」

「おるよ、部屋でなんかしとるみたいやから、用事あるんやったらどうぞ。」

「おおきに。」

「なんでわざわざこんなはよ起きて東京いかなあかのやつ!!  
姉ちゃんと話あるんやつたらお前一人でおうたら済む話やる。」  
「はいはい、文句いわへんの。」

んなこと言つて平次かて工藤君とおうて話したいんとちゃうん?  
？」

それはそやけどしかなあ・・・、とまだ　ブツブツ言っている平次の腕を引つ張つて新幹線に乗り込んだ。

「はあゝ、新幹線のる時間長いのゝ。」とグチをこぼす平次に和葉が思いついたように聞いた。

「なあ平次、あんたあたしに隠し事とかしとったりする?？」

「なんで俺が和葉に隠し事せなあかんのや、俺の事疑つてんか?？」

「え、ちゃうちゃう。なんとなく聞いてみただけや・・・。」

と和葉は紅潮して答えた。

まさかこんなこと言われると思わへんかったから・・・。

まるであたしが彼女みたいな言い方やな・・・。

『次は東京、東京。お降りの方はお荷物のお忘れ物なきようご注意ください。』

「よっしゃ和葉!! ついたでえ!!」

「さっきまで小学生みたいなことブチブチいうとったんはこの誰や・・・。」

「・・・じゃかしい・・・。」

そして二人は蘭の家、毛利探偵事務所を目指した、仲良く恋人のよう  
うに。

幸せな日々、恋人、友達、永遠に続けばいいのに、続かない日々。  
俺のそばで咲く春の華。

それを守るためなら命だって捨てられる。

愛するものを守るため。

俺は今日を生き抜く。

たとえ俺に明日がなくとも、夢い春の華は咲き続ける。

俺が咲かせ続けるから。

## 春の華5（後書き）

哀「久しぶりの更新ね。」

SA「はい・・・ごめんなさい。ところで哀サンはコナンのことを  
どう思ってるの?？」

哀「・・・。本日限りでこのコーナーやめさせてもらっわ・・・。」

SA「そんなこと言いなさらずに・・・。」

哀「ところで工藤君、毛利さんほつといちゃだめよ。」

新「・・・反省しております・・・。」

SA「哀ちゃんなんか怒ってる・・・?!」

新「ぜってえ怒ってる・・・。」

哀「・・・別に何もないわよ「ニッッコリ」」

SA「うわぁごめんなさいもう聞きませんんんん!!!!」

新「・・・そうしてくれ・・・。」

哀「ところで次回からは章が変わるのよ。」

新「これ四季シリーズだからな。」

SA「はいそうなんです。次は夏シリーズになりますよ!」

哀&amp;新&amp;SA「次回もお楽しみに!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0236a/>

---

四季シリーズ 僕等は・・・

2010年12月11日14時01分発行